

オフィス・ワークプレイスの知的生産性研究部会

SOFモデルの 企業・学校への 実用展開に向けて



オフィス・ワークプレイスの知的生産性研究部会
部会長

齋藤 敦子 さいとう あつこ

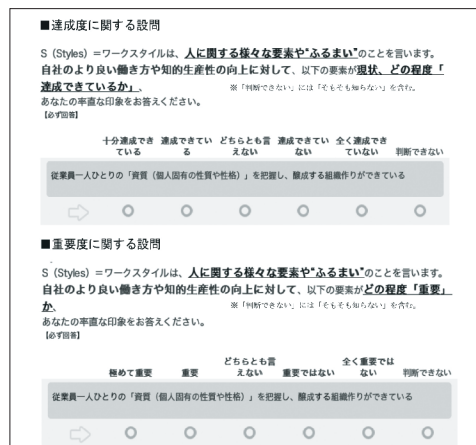
コクヨ株式会社 ワークスタイル研究所
主幹研究員

働く人と組織が健康で、より知的生産性が高い働き方をしていくために、働く環境＝ワークプレイスの整備は欠かせない。通路の幅、机の配置、照明の色や照度、パーティションの高さ、植栽や音など、人間の身体と行動、心理において何が本当に効果的（あるいは阻害しない）かを俯瞰的に見極めることが重要である。SOFモデルは知的生産性に関わる、働き方（Style）、組織（Organization）、ファシリティ（Facilities）という3つの要素を組み合わせて、持続的にワークプレイスを進化させていくことを支援するツールである。これまでの研究から、SOF間のギャップや職階による認識のずれ、上位戦略と施策のずれなどを可視化できることがわかった。現在は実際の現場で使いながら、実用可能なツール化を進めている。本発表では2018年度に行った2つの取り組みについて紹介する。

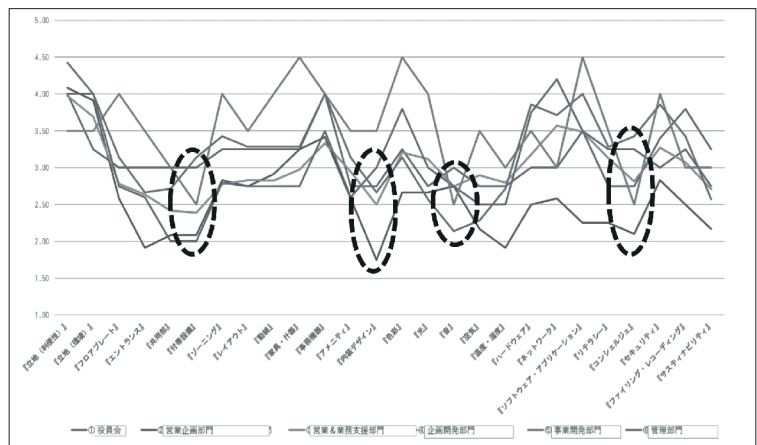
ひとつ目は民間企業における実用化検討である。SOFモデルの50項目のアンケートを、入社間もない社員でも回答ができるように改訂し、約200人規模の某社のオフィスリニューアルに際して、アンケート調査を実施した。SOFの50項目それぞれを、「達成度」と「重要度」について6段階で評価、さらに重要度の高い項目を5つ選択してもらった。結果として、SOFすべてにおいて「重要度」では4ポイントを下回る項目はなく、項目の妥当性を検証することができた。「達成度」については2～3ポイントの項目も複数見られ、特にファシリティについ

てはいびつな形となった。さらに、部門別・職階別に分析したところ、認識と評価に大きな差が散見された。例えば、職階別では全体的に本部長の達成度に対する意識がやや高く、次にメンバー、グループリーダーは低めに回答する傾向がみられた。ファシリティに関しては、部門によって重要視する項目が異なることもわかり、今後のリニューアルに向けてさらに個別に検討していくことになっている。課題として、現状は50問あり回答に時間がかかるため、経営者の参画が難しいことが挙げられる。短時間で回答ができる、又は設問数を減らすなどの工夫が必要である。

もうひとつの取り組みは、学校現場への展開である。このJFMAフォーラムを通してSOFモデルを知った横浜市公立学校事務職員研究協議会に所属する職員が、SOFモデルの学校版の開発を進めている。今、全国の学校で問題となっているのが教職員の長時間労働である。だが、時間削減だけでは教職員の負担になりかねないこと、新学習指導要領の施行や教育のデジタル化も視野に入れた働き方改革と環境改善が望まれる。横浜市公立学校事務職員研究協議会では、より質の高い学びの環境を持続的に構築していくことを目指して、学校版SOFモデルを開発したが、その一部を今回紹介させていただいた。部会として、2019年度も本研究を継続し、人を中心としたファシリティマネジメントを実現するために、さまざまな活動を行っていききたい。◀



図表1 知的生産性に関する設問



オフィス・ワークプレイスの知的生産性部会